

---

# 詩集 思い出の欠片たち

本城沙衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

詩集 思い出の欠片たち

### 【Nコード】

N8368I

### 【作者名】

本城沙衣

### 【あらすじ】

【横書き編集をしています。】

詩集です。

思い出の色々を綴ってみました。

楽しかったこと

哀しかったこと

切なかったこと

泣いたこと……

本城の思い出の欠片たちです。

突然 …\*…'。(前書き)

こちらの作品は本城沙衣に帰属致します。無断転記・転載は固くお断りさせて頂いております。

突然 ……

…\*° ……\*° ……\*° ……\*°

“ 出逢い ” というものは  
ある日突然訪れる

“ 出逢い ” というものは  
一瞬の出来事

“ 出逢い ” というものは……  
不思議な出来事

何をしていた訳じゃない

何を探していた訳じゃない

” 何か ” を求めていただけ

無意識に見つめていたとしたら  
きっと恋のはじまり

これって

ユメ？

アコガレ？

モウソウ？

あれ……？

やっぱり好きかも

少し笑いかけたら  
きつと気持ちが変わる

言葉を交わしたなら  
きつとキミがわかる

でもね

出会いは突然

すごく突然

その時なんて云おう

突然すぎて

やっぱり何も云えないかも……

f i n .

突然 …\*…’。(後書き)

人との出逢いは、奇跡に近いよね。  
だって、何億人という人々の中から出逢うんだから。



ぬくもり …\*…

…\*° …\*° …\*° …\*° …\*°

夏の風が

その向きを変える頃

あなたへの距離が少しだけ短くなった

ずっとずっと繋いできた

あなたへの想いが

秋風の便りとなって届いた気がした

何て言って伝えよう

「好き」って言ったら伝わるよね

でも

それはあまりに唐突すぎるから

視線を送ってみよう

見つめるだけで想いは伝わるの？

見つめるだけの恋は捨てたはず

だから勇気を出して見つめた

見つめる私の視線に貴方が微笑んだ

貴方が私を見つめてくれた

貴方の手が私の頬に触れた

貴方のその手に

ずっと繋いできたこの想いが

伝わった気がした

そして この先は……

今 この瞬間

貴方の手のぬくもりを感じていたいから

今は しばらく

このままで……

f i n .

季節外れの雪 ……

…\*° ……\*° ……\*° ……\*°

東京に季節外れの雪が降ると

君が住む町を思い出す

東京に春一番が吹く頃は

君が住む町はまだ銀色の世界

窓の外で舞う雪を見ていると

思わず手を伸ばしたくなる

同じ雪を見ているのかな……

同じ色の世界にいるのかな……

だから

東京に季節外れの雪が降ると

君がすぐ傍にいるようで

君と一緒に歩く時間の中にいるようで

冷たい雪も温かく感じるんだ

遠すぎると泣いた日もあった

会いたいと眠れぬ夜もあった

けれど

この雪がやむまでは

君のぬくもりを感じて

静かに舞う雪に包まれて

ただ君を想う時間を

ずっと抱き締めていたい

しばらくはこのままで

季節外れの雪が……好き

f i n .

季節外れの雪 …\*… (後書き)

本城沙衣に帰属致します

夢追い人・・・

・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・

あの日 キミは言ったね

「子供の頃からの夢だったんだ」って  
止めることなんて出来なかった

それでも着いて行ける自分がいたなら  
たとえ嫌われたって後悔なんてしなかった

何も言えないままで良い彼女を演じて  
笑っていた滑稽な自分がいたことが  
今も胸を締め付ける 苦しいくらいに

粉雪が待っていたね 音もない空間に  
最後に見せたとびきりの笑顔は  
偽りの笑顔

粉雪が手のひらに舞い降りて消えて行く姿が  
「それじゃ」と言っって背を向けたキミと  
シンクロした



冷たくなつた手を頬に当てて  
まだ笑いながら涙を拭つた  
笑つていても仕方ないのに

笑顔が好きだと言つてくれたキミだったから  
粉雪の中に溶けて行くように  
だんだん影が薄くなるキミの背中に  
笑いかけていた

キミを“夢追い人”と呼ぶならば  
夢の先には私がいたかつた

追いかける勇気があつたなら……

f i n .

夢の中だけでも・・・\*

・・・\*  
。

昨夜みた夢の中で 貴方は笑っていたね

写真の中の貴方も 笑っているんだね

いつでも笑ってくれているんだね

でも

あの日のままの笑顔が哀しすぎるよ

「好き」って言えてたなら

せめて貴方の気持に気付いていたなら

最後に笑っていられたのに

貴方が「好き」って言ってくれていた

笑顔を残せたのに

それが今も心に突き刺さる……想い

あの時の私の涙も哀しみも

貴方を想う気持ちまでも

全部

あの空へ持っていったんだね

青すぎたあの空へ

今 私は笑えているよ

夢の中でもいいから

「好き」って……

貴方の声が聞きたい

夢の中だけでも・・・\*  
。（後書き）

「グランド・ゼロ」連動詩

風にのせて…\*…\*…\*…\*…\*

…\*…\*…\*…\*…\*

あの日に帰りたいって

今 そう思う

何もかも輝いていた

何も怖くはなかった

だから いつでも笑っていられた

ずっとずっと

今が続くと信じていたあの頃

いつからかな

現実というものが  
近く感じたのは

あの時

風が通り抜けたんだ

真っ直ぐだった

自分の心に

夢を追って去る人を

黙って見送った あの朝

春だというのに

風がやけに冷たく感じたんだ

これが現実と

あの風が教えてくれたって

そう思う

信じたくなかったよ

貴方がいなくなるなんて

“ いい彼女 ” 演じた自分が悔しくて

何度も泣いて叫んだけれど

その涙も声も

全部 風に消えていった

春に吹く風は  
時として優しく  
時として残酷で

それでもあれから何度も  
春の風を受け  
暮らしてる自分がある

それが現実

サヨナラの哀しみも  
サヨナラの切なさも

きっと風が消してくれるから

あの日と同じように

きっと風が吹いてくれるから

そして

現実を受け入れた時

また前を向いて歩き出せる



風にのせて

風に想いを乗せて……

f i n .

風にのせて…\*…  
。(後書き)

「視線」コラボレーション

溜め息 ？…\*…\*…\*…。

…\*…\*…\*…。

溜め息ひとつ つく度に

遠い記憶がよみがえる

あの日 忘れたはずの淡い記憶

傷ついて涙を見せた私を抱きしめて

「アイシテル」

そう言った あの人

こんなに背が高かった？

こんなに背中が広がった？

こんなに腕が太かった？

ずっと一緒にいたのにね

ほんと気付かなかったよ

いつも見ていてくれたんだ

こんな ワタシ

ごめんね 気付けなくて

あのころ

恋に夢中だったから

何にも見えていなかった

笑っていた時も

泣いていた時も

落ち込んだ時も

いつも傍にいてくれたんだよね

だから安心できたんだ

心の中に

まだ違う誰かがいること

わかっていたんだよね

どうして

こんなワタシを包んでくれたの？

「忘れなくていい」なんて言えたの？

貴方に愛される資格

ワタシにあったの？

溜め息つくワタシを

許してくれたの？

f i n .

溜め息 ？…\*…・ (後書き)

「視線」 コラボレーション

溜め息 ? : \* : \* : \* : \* : \* : \*

... \* : \* : \* : \* : \* : \*

夏草の季節は程なく過ぎて

沢山の笑いと少しの溜め息の中

過去の恋は遠く流れて行った

「今が幸ならそれでいい」

忘れることはないけれど

本当にそう思っていた

ほんの少し

溜め息ついたのは

あの日の出来事が

遠い昔のあの恋が



遙か遠くに見えたから

呼び覚ましたのは

小波の音と季節はずれの海からの風が

やけに優しかったから

国道沿いの海岸線

ふと耳元で囁いたあの人

「無理しなくていいんだよ」

無理なんかしていない！

少し急ぎすぎただけだから！

溜め息は

ちよつとだけ苦しかったから！

少し走りすぎただけだから！

私に向けたあの人の笑顔

淋し気なその笑顔

苦しいよ……笑いかけないで

我儘なのは判ってる

だけど……

波打ち際に佇んで

ただ海を見ていた

波の音に消されては

時折聞こえるその音は

あの人の溜め息……

f i n .

溜め息 ？…\*…・ (後書き)

「視線」 コラボレーション

扉：\*：\*：\*：\*：\*：\*。

…\*：\*：\*：\*：\*。

昔の恋は忘れたはず

嘘……じゃない

嘘……

言い効かせても

その想いは止められない

淋し気な笑顔の裏に

あの人の言葉を覗た

「無理しなくていいよ」

いつも何処かで探してた

遠い夏の思い出

初めて見た気がした

あの人背中が眩いた

「大丈夫だから」

何も言えない……

さりげなく手を振る

「さよなら」に

遠い記憶がよみがえる

いつか恋したあの遠い夏の日

さりげなく「さよなら」と

手を振るあの人とあの人が

リンクした

流れる季節は

恋していたことを

風化させてはくれない

止めることのできない

恋のはじまりが

またゆっくりと歩き出す

それぞれの未来への扉は

まだ

開いていますか？

f i n .



扉：\*：・：'・（後書き）

「視線」コラボレーション

水彩画：\*：\*：\*：\*：\*

：\*：\*：\*：\*

思い出は

過去からの贈り物

未来は

あなたへの夢の扉

ひとひらの雪に誘われて

あなたのいるその街へ

勇気をください

その瞳の向こうに

何を見ているの？

どうか私を見てください

ゆっくり流れる季節の中で

ゆっくり育む優しい気持ち

ずっと

そばにいらさせてください

ずっと

私を見ていてください

そして

抱きしめてください

あなたの瞳に

私が映っていますか？

あなたの中には

私の居場所がありますか？

私の心はあなたでいっぱいです

いつか見た

あなたという風景画

モノトーンだったキャンバスが

すこしずつ

すこしずつ 色を染めてゆく

すじごわじ

それは

幸せ色の水彩画

f i n .

水彩画…\*…・（後書き）

「視線」コラボレーション

扉 ？：：\*：：。：：。

：：\*：：。：：。

あなたと出逢い

あなたに魅かれて

あなたを想う度に切なくて

愛しい気持ち

押さえきれずに

流した涙は

星屑に返しながら

眠れぬ夜も過ごした

「夢の中だけでも逢えたら」

そう思うほど人を好きになれる

自分がいたことを知ったあの季節

「さよなら」と告げた

あの人も今は幸せとそう願う

「好きです」と告げた

あの人の瞳の奥

そこに見えたのは未来標へ

例え 今 まわりの全てが消えても

あなたが好きです

ふりそそぐ柔かな日差しの下でも



吹きすさぶ強い風の中でも

あなたが好きです

扉を開く音が聞こえる

風になった私がいる

ゆっくりと

ゆっくりと

ゆっくりと

扉の向こうにいる

あなたのことが

好きです

f i n .

扉 ？…\*…・ (後書き)

「視線」コラボレーション

光…\*…’。

…\*…’。

“光”と書いて“あい”と読む

“光”と書いて“めばえ”と読む

“光”と書いて“めぐみ”と読む

“光”と書いて……

あなたは何と読みますか？

灰色の厚い雲に覆われた空

それでも

雲の上には青い空が広がっている

それは“光”が空を青色に染めているから

自分たちから見えないだけ

厚い雲の隙間から

細く……でも輝く光が降り注いだ時

その“光”は“きぼう”と読む

そして“ゆめ”と読む

私たちに降り注ぐ光は

いつも

いつの時代も夜明けを意味し

未来へ羽ばたく礎となる

“光”が降り注いだ瞬間

それは新たな世界が待っている

暗く淀んだ世界も心も

その“光”に照らされ

輝きを取り戻す

輝きを思い出させる

たくさんの“光”

たくさんの“光の意味”

それぞれがそれぞれに

それを感じればいい

そして羽ばたけばいい

未来へと

“光”に誘われて……

あなたは“光”と書いて

何と読みますか？

f  
i  
n  
.

光…\*…・ (後書き)

別サイトで展開されている「勉強会コミュ」のお題で出された「光」より。



月光：\*：\*：\*：\*：\*：\*。

：\*：\*：\*：\*：\*。

時の流れさえも止めてしまおうと思えた

月の光に仄かに照らされた部屋の中には

君がただひとり

窓辺に揺れている白いカーテンも

夜の静寂に溶け込んで行く錯覚

その美しい横顔と

その清らかな微笑みが

僕の心を狂わす

その白い指先が奏でているのは

「月光」

かつて僕の心を君の虜にした

君が奏でたあの曲

君が僕の傍で

永遠に微笑んでくれるのならば

その旋律を奏でてくれるのならば

僕はもう何も望まない

たとえ君が誰のものになろうと

この愛は変わらない

邪魔はしない……

f i n .

\* 「月光」：「月光・第1楽章」ヴェーターベン

月光…\*…・ (後書き)

別サイトで展開されている「勉強会コミュ」のお題「月光」より。

色あせない約束…\*…  
・ (前書き)

風の向きが変わり

夏の匂いを連れてくる頃が

私たちの青春だった

色あせない約束：\*：：：：\*。

：\*：：：：\*。

瑠璃色の海が

あの頃の幸せだった

打ち寄せる波に

時間も忘れ戯れていた

突然のスコールに

びしょ濡れになっても

それが心地よかった

隣には貴方がいたから

夜の静寂に紛れても

あの時誓った想いは

まだ此処にある

「ずっと離れない……」

流れる時間は時として残酷

あの幸せの一瞬でさえ

奪ってしまうのだから

本当に愛する人との別れの時さえ

止まってはくれないのだから

別々の道を歩いても

頑張っていれば また会える

想っていれば また会える

生きていたら また会える

生きていたら……

そう信じて疑わなかった

また会える

容赦なく過ぎゆく時の中で

あの頃の瑠璃色の海はまだそこにあり

打ち寄せる波も引いては返る

あの頃の時間を取り戻せるのならと

何度叫んだらう

叫んでも

叫んでも

もう戻ることのない時代の海原



変わらず此処にあると思うものが

少しずつ変わっていても

カタチを変えていても

変わらないものがある

そう……

時間も時代も流れて時を風化させても

あの時の約束だけは ずっと色褪せない

この胸の中では……ずっと

私が生きている限り

そして

また夏がきた

f i n .

指輪 ……\*

…\*…。

いつも見ていたはずの

その俯き加減の横顔に

不意に触れなくなった

そんなにまつ毛が長かった？  
そんなに優しい顔だった？

好きな音楽に夢中になって  
足でリズムを刻みながら  
小さな歌詞カードを覗いてる

聴いていたのは

「指輪」という曲

出逢ってすぐの頃  
私に唄ってくれた

ギター1本で語りかけるように

「君の欲しがっていた指輪を  
見つけた…」

こう口ずさんで  
笑いかけてくれた

そんな夜が

未だ記憶に新しい

同じ光景

同じ横顔

同じ夜

特に何も無い日だけれど  
特に大きなこともないけれど

普通の時間が流れるだけの

普通に過ごすだけの時間だけれど

二人で過ごすことが出来る

こんな幸せがずっと続いたら

何もいらないと心から思った

いつか何処かで読んだような

目にしたような 耳にしたような

そんな言葉だけれど本当にそう思った

本当に大切にしなければいけないものが  
そこにあっただから

それに気付いたから

初めてその唄を聞いたあの夜の

あの時と同じ月明かりと一緒に

その優しいメロディと貴方の唄声が  
よみがえる

そんな貴方を見つめていた  
私の視線に気付いたの？

少し目を上げこちらを見ると  
少し笑った貴方がいた

そして……

「今度 指輪を買おうね」

もう一度

貴方に恋をした

f i n .

季節：\*：\*：\*：\*。

色彩りどりに染められてゆくのに

その存在は、何処か儂い

太陽の光や空気の流れ

風の香りも違うのに

その存在の居場所さえ定かではない

その中で沢山の夢が生まれ

人々は笑い　そして歩いている

その中で素敵な誰かと

出会い　恋もする

時として

悲しい別れもあり

泣けることもある

それでも

その中の全ては

いつも輝き 手を広げ包んでくれる

人の感性に触れるとき

それは詩<sup>ウタ</sup>になる。

何時如何なる時も

それは変わりなく

揺るぎない力で支えてくれる

「また、今度、会いましょう」

そう言って別れを告げると

それは、新しい始まりのとき

そうやってずっとずっと昔から



いつも見守ってくれている素晴らしき友

優しく包んでくれる大きな愛

儂いようでも それは大きな力

居場所は定まることはないけれど

それは いつも傍にいてくれる

そう……それは素晴らしき友

それでも、二度と会えない……友

会いたくても

二度と会えない……一度きりの友

季節という存在

f i n .

雨：\*：\*：\*：\*：\*

いつだって貴方に会いたいよ

いつだって貴方を感じていたいよ

そんなこと解りきっているはずなのに  
つい強がりを書いてしまったの

あの日 雨が降り出した時  
傘の花が咲いたね

歩道橋から見下ろしていた  
街の風景が色彩々に変わって……煙ってた

涙顔 見られないように  
そっと傘で隠した あの日の午後

さっき「さよなら」と告げたばかりの  
愛しき人が

今はもう隣にはいない実感が  
突き刺さる

こんな雨の日は  
相合い傘で歩いていたら

隣に空いた空間が  
一人歩きしていた私を責めている

「どうしてその手を離してしまったの？」

雨の日って やっぱり苦手 思い出すから

でも本当は雨の日って 好きだった

傘の中で貴方と寄り添えるから

あれから傘をささなくなった

ずぶ濡れになっても 雨の中を歩いている

だって雨の雫が涙を隠してくれるから

あの日を思い出して ひとり泣いていても

雨の雫が隠してくれるから

あれから

傘も嫌い

雨も嫌い

こんな雨の日は嫌い

でも……

雨の雫だけは好き

貴方を思い出す涙は隠してくれから

「さよなら」と言っても

いつものように追いかけてくれると思ってた

「いつものワガママ」だって

思ってた欲しかった

出逢った頃のように

どうして笑っていられなかったの？

どうしてフザケ合えなかったの？

いつから？

こんなに苦しいのなら出逢わなければよかった

こんなに愛しいのなら微笑んでいればよかった

最後に見た貴方の瞳には  
私は映っていなかったね

涙で見えなかっただけ？

せめて そう思いたい

その瞳に恋をしたのに  
その瞳を曇らせてしまった

それは私のせい  
困らせてばかりいた私のせい

最後に言わせて 最後のワガママ

「大好きです」

別れの予感  
は雨の予報

雨の予報は……  
やっぱり雨

f i n .

約束 . . . \*  
|

たったひとつの約束さえ守れなかった

あの夜 月の明かりに照らされて  
静かに眠る貴方に約束したこと

今度は私が支えになる

あの夜持つことが出来た  
貴方を想う気持ちさえ  
守り続けることが出来なかった

少し遠く離れたただけなのに  
車をとばせば  
2時間くらいのところなのに

夢を追って  
この土地を離れた貴方を  
許すことが出来なかった

幼かったから……

そう思えば簡単なこと

それでも

失ったものの大きさは

そんな理由では片付けることは出来ない

何千回の「ごめんね」を言っても

その声は もう届かない

何百万回の「好きです」を繰り返しても

もう その気持ちは届かない

わかってるけれど

繰り返し言い続けてる

わかっているのに！

また同じ言葉を繰り返している

こんな私を笑ってよ

滑稽な私を……見ないで

たったひとつの約束を

守ることが出来なかったこと

今でも心に棲み続ける容赦ない罪悪感



たったひとつの約束だけれど  
すぐすぐ大きなもの

貴方と歩くはずの人生が消えた瞬間

もう二度と手にすることのない  
幸せにカタチが崩れた……あの日

「さよなら」と別れを告げたあの夜空には

貴方に誓った約束を 思い起こさせる月が  
同じ明かりを灯している

見上げた空には

左上が少しだけ欠けた月と

満点の星が輝いていた

f i n .

卒業 . . . \*

「仰げば尊し」が哀しかった

この曲が終わったら

このキャンパスともお別れだから

たぶん一番輝いていた青春時代がここにある

あのイチヨウの木の下で貴方に恋をしたよね

あのカフェテリアで放課後 お茶したよね

あの教室でノートの貸し借りしてたよね

授業をそつと抜け出して海へ行つたっけ

音楽室でサークルの仲間と騒いでいたっけ

桜並木を肩を並べていつも歩いていたよね

静かな図書館で友達とふざけあって叱られたっけ

ゼミの先生に呼び出されて落ち込んでいた時  
優しく慰めてくれた親友

「明日から全部思い出になっちゃうんだね」

そう呟きながら卒業の唄を口ずさんでいた

卒業式が終わった後 記念写真撮ったよね

背景には懐かしい校舎

隣には4年間ずっと支えてくれた親友

後ろにはイチヨウの木の下で初めて逢った貴方

大正時代の女学生みたいに袴姿で笑っている私達

スーツを着込んで少しだけ大人びた貴方

未来なんて見ることは出来なかったけれど

それでも夢を持っていた

楽しかった

楽しいことばかりじゃないと

何処かでわかっていたけれど

それでも新しい扉の前に立ち  
その先を見つめていた

みんな笑顔で

この笑顔が永遠に続けばいいって  
誰もが思っていたはず

現実の厳しさに笑顔が消えそうになった時

きつと支え合えるって信じてたよね

「ずっと友達だよ」

そう言い合った その言葉が嬉しくて 哀しかった

大学の正門を出た時 みんなの後姿を見送った

あんなに背が高かったっけ？  
あんなに肩が広がったっけ？

ずっと好きだった人に思った

あんなに素敵な女性だったけ？  
あんなにスタイルよかったけ？

ずっと一緒だった親友に思った

明日からみんな 別々の路を歩いて行くけれど

この記念写真がいつかセピア色になっても

あの輝きは色褪せないって  
ずっと思っているから

未来への大切な贈り物だから

もしかしたら もう逢えないかもしれない

もしかしたら また逢えるかもしれない

写真の中の笑顔がずっと変わらないように  
みんなもずっと笑っていて

そう願いながら笑顔で手を振った

みんなの姿は今も私の宝物

いつかまた逢える日が来たら

その時は また笑い合おうね

約束だよ

桜の便りを聞く季節になると

遠い異国の地においても 皆のことを思い出す

頑張っているかな

笑っているかな

時々は思い出してくれているかな

皆がそれぞれに幸せでありますように

そして今

少し色が変わった写真に目をやるよ

口ずさむ歌がある

『 卒業写真 』

と……

『 未来予想図 』

f i n .

愛しき人………。

出逢った瞬間から運命だと思った

「何処が？」と聞かれても説明出来ない

ただ 何かが触れた気がした

次に会う約束なんて出来ない人

そんな関係だった

秋が過ぎて冬が来て

春が巡り夏を迎えた頃

必然の重なりかな

何故かよく会うようになっていた

やっぱり運命の人？

なんて思ったりもしていた



友達でもない関係

恋人とはとうてい言い難い関係

不思議な関係

そういう関係だから

前世からの繋がり？

なんて感じてもいた

もっと話せていたら

もっと近づいていたら

もっと心に入れていたら

変わっていたかな

今の関係

でも……

この気持ちは伝えることは出来ない

もし「好きです」と告げたら

何かが壊れてしまいそうで……それが怖い

アノ人と出逢った季節がまた来る頃

この想いは何処にあるのかな

愛しき人……

せめて次の秋までは離れて行かないで

f i n .

響き・・・\*  
|

この身が引き裂かれそうな程  
貴女を愛した

きっとこれが最後の恋でしょう

愛……

この先

誰かを好きになったとしても  
貴方以上には愛せない

桜が咲いても

波の音が聞こえても

秋風が頬を撫でて

ひとひらの雪が舞っても

全て

貴方に結びつけてしまおうでしょう

桜の花びらが舞う中

そっと唇が触れたことを

打ち寄せる波に戯れながら  
はしゃいでいた二人を

少し冷たい風を感じると  
その手で暖めてくれたことを

吹けば飛びそうな軽い雪を  
受け止めては私にくれたことを

どうしたら  
誰かを貴方以上に愛せるの？

どうしたら  
貴方を記憶の中から消すことが出来るの？

最後に贈り物をしてくるとしたら  
その方法を教えて下さい

もしそれがダメなら

せめて悲しみと切なさを  
思い出に変える方法を教えて下さい

貴方から「さよなら」と  
告げたのだから

突然の嵐に

私はただ立ち竦むしかありません

狂おしい程

貴方を愛しています

誰かが隣にいる貴方を

想像したくはありません

幸せそうに微笑んでいる

貴方を想像したくありません

優しい言葉をかけられている

誰かも想像したくありません

それでも私の記憶の中には

そんな貴方の姿だけが

生きて続いていきます

そんな私は息も出来ません

苦しすぎて

いつか貴方を思い出に出来ますか？

いつか私も幸せになれますか？

今は……

「さよなら」と告げた貴方のその声だけが

私の中に響いているだけです

f i n .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8368i/>

---

詩集 思い出の欠片たち

2011年10月6日02時48分発行